2015年5月17日八街教会メッセージ

招きの言葉　詩編22:23-24

讃美歌　ソングシート27（わがーよろこーび）、ソングシート32（あめなるよろこび）

聖書箇所：詩編23:1-6

　　　　　　　　　　　　　　　**主は私の羊飼い**

　本日の聖書箇所は詩編23編であり、有名な箇所です。「主は私の羊飼い」ではじまり「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」で終わる詩で、心が洗われ、あらためて主なる神を信頼し、その守りの中に入れられることを望む気持ちにさせられる箇所です。この詩は、キリスト教では葬儀の時に読まれることが多い詩です。3節にある「生き返らせ」という言葉が、からだのよみがえりである復活を連想させますし、4節の「死の蔭の谷」という言葉が「死者の国」への道を想像させるからです。旧約聖書をキリスト教が、かなり勝手に読み込みをして、これは主イエスの預言である、とか復活の予型が示されているとか、いう解釈をすることはかなりあることです。しかし、このような解釈の仕方は、自分勝手な解釈を産み、旧約聖書の言う本来の意味を曲げてしまう可能性も十分あります。では詩編23編を当時のイスラエルの社会とヘブル語原文に極力忠実に理解しようとすると、どのようになるでしょう。

　まず、この詩には「ダビデの賛歌」とされていますが、このタイトルは後の時代につけられたもので、この詩は、ダビデの時代に書かれたものではありません。イスラエルの地に現実に居て、この詩を読んでいる様子はありません。従って、ユダ王国が滅亡し、イスラエルの上層部はバビロニアに連れ去られた、いわゆるバビロン捕囚の後の作品と考えるべきです。他方で、ペルシャの支配になってから、ユダヤ人はエルサレムへの帰還が許されますが、その事件の気配もこの詩にはありません。すると、この詩は、バビロン捕囚にあった、ユダヤ人が故郷を思い、歌いあげた詩である、と解釈するのが妥当と考えられます。すると、この詩に描かれている状況は現実に詩人が置かれている状況ではなく、詩人の信仰的希望の表現である、と言って良いでしょう。

　本文に入ります。第1節です。「主は、私の羊飼い」と言われています。「羊飼い」は平凡な仕事であり、特別な技術も必要ない仕事ですので、仕事としては低い仕事と見られていました。そのため「羊飼い」の職業に在る人間は見下されていた、というのが現実でした。日本で「部落民」差別というのがありますが、「羊飼い」はそれと同様に見られていた、という説もあります。私、詩人はそのような「羊飼い」に守られている家畜である、というのですから、この1節は社会的に下層階級に属する人々の状況を念頭においたもの、と言って良いでしょう。詩人は、バビロンの地にあって奴隷として扱われていたのです。そのみじめな境遇にある我々を導く「羊飼い」を希っているのです。

　2節では「緑の牧場」が出てきます。ヘブル語直訳では「若草の野辺」です。若草が生え、思う存分食べられる場所です。「いこいの水のほとりに伴われる」と言っています。オアシスのようなところです。イスラエルの地では「水」は大変貴重なものであることは言うまでもありません。日本のように水があふれるばかりにある国とは異なります。まさに、「幸福」を絵に書いたような情景です。

　3節で、「私の魂を生き返らせ」と言われています。食べるもの、飲むものが充分備えられ、魂も生き返る、というのです。直訳しますと「魂にいのちを回復させ」となっています。落ち込んだ魂にいのちを甦らせる、ということです。さらに「義の道に導かれる」と言っています。「義」とは神様が「良し」とするようにする、ということで、イスラエルの神の本質を表現した重要な言葉です。アブラハムは「主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と言われています。従って、ここでは、羊である詩人は羊飼いである主によって、神様と正しい関係にある所に導かれる、ということです。神の支配が完全に覆っている「神の国」に導かれる、と言ってもよいでしょう。

　4節の「死の蔭の谷」と訳されている言葉は直訳すると「暗黒の谷」です。必ずしも「死」と繋がったことばではありません。後の時代にエルサレムの郊外に汚物を捨てるヒンノムの谷というのができましたが、その谷は罪人が死ぬと行く地であるゲヘナとなりました。キリスト教の時代に、このゲヘナと4節のゲヘナが結び付けられた可能性はあります。新改訳の訳では「死者の国への道を通ることがあっても、わざわいを恐れない」となりますが、もともとの言葉に即して言えば「暗黒の道を通ることがあっても」ということになります。「あなたのむちとあなたの杖」のところの解釈はむずかしい、です。羊飼いが使う道具に即して言えば、「あなたの棒とあなたの杖」です。棒と杖で、迷い出ないように導くのです。また、羊をちゃんと歩くようにさせる道具でもあります。棒と杖で懲らしめる、という趣旨ではないでしょうが、悪いことをする羊は、これで懲らしめを受ける、ということも意味しているかもしれません。もしそうだとすれば、この思想は、ヘブル書12章の「懲らしめ」の教訓に繋がっている、と言えましょう。ヘブル書12:5-6をお読みします。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。/主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」。

　5節に「私の敵の前で」とあります。「私を苦しめる者達の面前で」と訳すことも出来ます。「食事をととのえ」は直訳しますと「埏（えん）を設ける」です。「むしろをしいて宴会を用意する」ということです。わたしを悩ます者の前で、主は、私を慰めるために宴を催してくれる、というのです。そしてそこで「油をそそいでくださる」というのです。「油注がれたもの」としてのメシアという意味ではありません。メシアの言葉となる「マシーアハ」ではなく日常的に「油を塗る」という意味で使用される「ダーシン」という言葉が使われています。しかし、祝福の徴として「油を塗る」ということは共通した意味でしょう。慰めの宴に招かれ、そこで祝福を受ける、というのです。「油を注ぐ」ということからこの箇所を「王の宴席」と解釈する考えもありますが、無理があります。

最後の6節です。最後の「住まいましょう」は原典のヘブル語は「帰る」という言葉です。「神に立ち帰る」という時に使用する「シューブ」という言葉です。ところが、ギリシャ語訳を始め、ほとんどの翻訳は、これを「ヤーシャブ」という言葉と見て「住む」または「座る」と訳しています。英語で言う「カンマ」のような一字を追加して理解しています。聖書を書き写す時、一文字落とした、またはかすれて見えなくなった、と理解することを意味しています。確かに、「帰る」では「いつまでも」と繋がりません。わたしも「ヤーシャブ」と理解するのに賛成です。「住む」と「座る」の2つの意味がありますが、「住む」の方が妥当です。日本語訳、英語訳とも大部分がこの訳となっています。聖書は神の言葉ですから、人間が勝手に変更してはなりません。イスラエルの民にはソーフェールという写本の専門家が昔からおり、彼らは意味が解っても解らなくても、そのまま写す、ということに徹していましたから、この箇所のように、「書き落としたか、かすれてしまった」と解釈しなければならない、ところは極めて稀です。だいたいは、神学者の間で昔から議論され決着がついていない箇所になっています。イスラエルの民の「言葉」に執着する執念みたいなものは信じられないほどです。

　この前にある「いつくしみと恵み」はいろいろに訳すことができます。口語訳では「恵みといつくしみ」で新改訳とは順序が逆です。新共同訳も口語訳と同様「恵みと慈しみ」です。原語は「トーブ」という言葉と「ヘセド」という言葉です。どちらも旧約聖書では極めて重要で多数使用されている言葉です。両方ともいろいろな意味があり、どちらが正しい、というものでもありません。言葉の直接の意味からすれば「幸福と慈しみ」というのが訳になります。「幸福と慈しみが追いかけてくる」となります。幸福と慈しみの満ちる世界に入れられる、という意味でしょう。そして、そこにある「主の家」にいつまでも住む、というのです。これは、神の国の描写です。新約聖書での言葉では「天の御国」と言っても良いでしょう。

　一つイスラエルの異常ともいえる、言葉に対する執着を示していることを申し上げます。新改訳聖書で4節に「おられます」という言葉があります。これは「神ともに居ます」の「います」で、英語でいえば「ウィズ」という前置詞一個です。23編をこの語で区切って、この語の前に在る単語の数は26個で、この語の後にある単語の数も26個なのです。この26という数字は特別な数字です。イスラエルの主は「ヤハヴェ」と言いますが、この字で表される数字の合計が26で神聖な数字と見做されているのです。数字の数え方は、ABCのそれぞれが１、２、３、である、として数字代わりに使われるのです。「ヤハヴェ」は10+5+6+5で26です。おそらく、意図的にこのようになるように言葉を選んで使用したのだと思われます。このような言葉に執着した技巧的なことは旧約聖書に数多くあります。

　詩編23編を順次節毎に見てみました。これをじっくり何度も読みますと、本当に慰めが得られます。そして旧約聖書でキーワード、と言われている言葉が網羅されており、詩編の神髄の一つとして歌われたものだ、と言えます。内容を見ると、これは、苦難、悲しみのなかにある人に対する主なる神の約束です。貧しく、無価値とされ、羊に譬えられた人々に対する約束です。これらのことから、葬儀における、残された者達に対する、慰めの言葉として詩編23編が読まれることは良くわかります。この詩が書かれた当時の状況に照らして考えれば、放浪の民とされたイスラエルの一詩人が遠くバビロンの地で、自らの置かれた状況に対し涙して、カナンの地を思い起こし歌ったものです。深い悲しみが背後にある歌だと言えます。単に、天国の様を描き、神様がいずれ、自分をそこに導いてくれる、と言っている詩ではないのです。詩人はカナンの地に帰ることのできるような立場ではありません。バビロンに奴隷として連れてこられた人物か、またはその子孫です。将来にこのような夢を描けるような状況ではありません。絶望的状況と言ってもよいでしょう。そこに主なる神の約束が与えられるのです。この希望により、詩人は生きて行こう、としているのです。

　この23篇を理解する上では、この前の22篇の延長線上に23篇をおくのが良いでしょう。詩篇22篇は「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」という言葉で始まります。これはイエス様の十字架上の最後の言葉であり、マルコ15:34で「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と記されている言葉です。アラム語です。これは「神から見捨てられる」という絶望の状況を指した言葉です。この叫びが続き、11節と19節で「遠く離れないでください」という願望の言葉が現れ、遂に23節から主への讃美が始まるのです。詩篇の分類では「個人の嘆きの歌」とされています。嘆きの歌は、嘆きや、悲しみで始まり、後半で賛美に変わって行くのです。そしてこの賛美の後に、主の約束に全面的に信頼し、希望を歌うのが詩編23編です。絶望の淵から、主への願い、そして賛美へ、その終着点は主なる神の約束への希望への確信を告白する、ということです。イスラエルの民の「希望」の特徴は、主なる神への全面的信頼即ち信仰と結びつき、その希望が実現の確信に高められ、現在そこにあるものとなる、ところにあります。従って、詩編22篇・23篇の詩人においては、23篇で描写された神の国は神様と私との関係では既にあるものなのです。この世では将来の終末的出来事と見えますが、信仰の世界においては既に実現していることなのです。その中では、この世の目から見れば奇跡としか言えないことも起こり得ます。イエス様が「もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」とおっしゃられています。私はこれを「希望の現在化」と言っています。詩篇23篇は「神様の約束への希望が現在化している」といえるでしょう。しかし、詩編23篇の詩人はその現在化した神の国の具体的出来事をこの世で見てはいません。しかし、私たちにはイエス・キリストが「神の国」の姿を体現してくださり、その方が復活の主として、我々を守っていてくださる、時に生かされています。詩篇23篇の示している大いなる恵みを私たちは主イエス・キリストに見る幸いを得ているのです。祈ります。（ご在天の父なる御神様、今日、私たちを呼び集めてくださり、御言葉を学ぶ機会を与えてくださり、ありがとう、ございました。今日は詩篇23篇から学びました。旧約聖書のなかでも珠玉の一章とされている箇所です。この詩を歌った詩人の置かれた状況に思いを馳せながら、神様の約束の確信に立つ信仰者の姿を見ることができました。慰めの御言葉を感謝致します。私たちは、本当に神様より憐みをうけるに値いしないものですが主イエス・キリストの贖いの故に、主の羊とされました。導きの主を信じます。神様の約束がこの身に、この世になりますよう祈ります。救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）